

復古夢物語第六

第貳拾五回

東洋書局刊行

松村春輔編輯

再説這日ナリ長藩福原越後の伏水の兵士五百餘名を引

卒一差哉山崎の兵ふ應ぜんと十八日夜半伏見と進發せ

この日福原越後の出立の紺糸威の鎧と穿袂狸々排の

軍袍を着倣一金革作りの烏帽子と戴き黒毛の若

駒ふ金梨金ふ時繪倣一たる鞍と置き白麿と採

是ふ跨ぐり威氣凛々として旌旗を風ふ靡う大いふ勇  
んぞ進撃す既みして深草宝塔寺の門前ふ到る是よ  
り嚮大垣の隊長小原仁兵衛を豫め計策を定る伴  
つて炬火を山野ふ設けしう数里照映煌々として白  
日の如く信々仁兵衛が男小原主計。高橋三郎兵衛の兵  
士二百餘名を連も宝塔寺を距る事一里餘めし道路  
の傍に伏せ信々小原仁兵衛の自ら兵士二百餘名を指  
揮して長軍の動止を窺ふたり長軍の是を知らず大

垣の屯兵の未と遠し進め々と急ぎ疾間遠橋の上ふ来  
り既み過んと倣しけり折し大垣の伏兵一途ふ發り破聲  
雷の如く彈玉雨のぞく降来りしう長軍福原も伏兵あり  
と知もども是ふ當りて闘へば嵯峨山等の兵と約せし時  
間ふ後きんと思ひ急ふ命を下し海螺を吹き旗鼓と進  
めし直ちふ馳し此地を過んとする大垣の兵の則り鎧  
江の兵と力を合せし撃戦甚と烈しけり長軍寸歩  
も動く事叶まだ信りける所へ桑名藩久徳久兵衛新

徹組の魁首近藤勇、彦根藩印具其等數百の兵士と卒  
ひ大垣の後援を倣すふと長軍苦戦云ふ可もあらず塊  
落神死して復戦せんとする勢ひ多しこの時長軍の隊長  
桂勝三郎、三分利徳三郎、田中誠助等大いに罵りつて云  
ふ咄懦の夫果して事と倣き能はずと僅う兩三騎と卒ま  
て直ちに進む敵を衝く偶々福原越後敵の銃玉の中り  
馬より動し落ちけるに長軍大いに散乱し咸先と争を以  
逃出きぬ越後等も屋敷身を脱して伏見に走ると大垣の

兵は是を追撃して黒漆の里に到る此時長軍参謀中村九  
郎殿りみく今黒漆を操出たりと大垣勢の押寄せ  
来ると行合ひ一うの忽ち九郎兵士と指揮し自ら刀を打  
振りつ殊死防戦尽しける時夜に殆と明多んとまらふ  
に大垣の兵は軍を引く深草に既る是より中村九郎  
等ハ残兵三百人と擁して丹波橋に至り再び京師に入  
らんとするに彦根大垣籍江の兵又要路を梗塞すれを  
路を横大路村に取ると山崎に赴き終に中立賣御門の

役め會する事と得ざりしあり有徳程み京師ふて長軍  
 敗走の跡みりしり尚も大寺院又ハ町家み潜伏するも計  
 りがごとしと探索し會越彦藩を始トめ町奉行同心と引  
 連見市中と見廻り怪敷者とおおしきり或ハ討捨或ハ  
 捕縛しあつたの緒方み放火せしりこの地彼地より焼上  
 り遂山の市中一面の大火と燬り折節暴風烈しなまハ  
 猛焰弥々立登り四方八面廣がりけり其火既み六角の  
 獄舎み及みんとするみを是より先長州の陣み関係し遠

復古六下三

獄中み囚座せし三條家の臣丹波出雲寺西三條家の臣河村  
 能登守筑前の脱士平野次郎及び五條の殘黨銀山の浪士等  
 総々三千三名と獄中より斬殺み處す折しも平野次郎河村  
 能州新子の刀下み臨んぞ辞世の歌あり尤も粗穢卒直り  
 々婉暢の風み之しけとどもまゝ忠嘆義慨の志しハる  
 足るべし

○平野次郎大中臣國臣の辞世  
 大君みまがけまのり我いのち今し終まりの時を来みひりし

○河村能登守秀就の辞世

「我魂の長門のうらにありて世をおろし君の影をまをらん  
這の人々の積年國家の爲め憂苦と忍び東西に奔走し盡  
か做せし人ども未だ時運の至らざるや素志を潰さず  
て一朝九泉の鬼となり果しに豈傷しき事ありや  
却説長軍國司信濃の京師の軍の利を失ひ一端天龍寺まぐ  
飯りし敵兵の襲ひ来らん事を討り山崎はらひ引渡さ  
ると同廿日の朝天龍寺の長軍追討の令を薩侯へ命ぜらる

復古六下四

けりみぞ則ち討手の隊長として吉田信太郎。日向直助等  
兵士三百名を引率して天龍寺に馳来りしこの時長軍  
の委多く落去し跡に雑兵の逃げ残れし者兩三人あり  
し被褥を捕り尚も潜伏やあつらんと残る狼を捜ま  
し人ども怪しき者も人ざりけし時へありし兵糧を更  
なり兵器をも分捕做し寺院の僧徒を逐拂ひ方丈庫裏  
へ大砲を打放し焼立るみぞ法堂関山堂及び塔頭七ヶ院  
洗心寺共外嵐山前の三軒家まぐ焼失せり然るは祥堂

經堂舍利堂鐘樓勅使門等が恙なく残りぬ又法輪寺の由長  
軍が屯ろせし所をとて放火しし焼立る少ぞ具ひ  
嵐の葉櫻も散り果る成りか薩軍の其日京師の軍  
を飯のぬ盛る薩藩が分捕る米五百俵を遠度火災の  
から者共へ給りける借も山崎天王山の京師より敗走  
の兵士序次に馳集り既に散乱せ後に兵士極  
めく勢も亦京師の一戦に心を奪われ再闘せんと欲ま  
る者勢もあきと見て真木和泉衆に諭しし敵軍寄来

復古六下五

るも此山に據て兩三日と支へる忍ち少將侯長門の上京極に  
あらふ遇ん其時を期し潔く一戦に國賊を誅す進めぬ憤  
激を做しり人とも再度の勝算計りがし進めぬ輩  
も多くして更に決議を做す折りも少將侯の讚州多度津  
まへ海路を進發あり一処に昨夏の仇を報ぜんと一外國の軍  
艦長門の馬関に襲来するの報りかは夫より本國に  
既に告ありける衆も亦に説いて敗餘の再奉  
勝算ありべし且つ本國に大事あり之を捨らい何ぞ



まど  
 益と  
 田央  
 火と  
 けり  
 煙の  
 京師  
 の  
 と見  
 て  
 飯  
 る  
 ふ



復古六下六

勇士の本色ふあらんや今急な本國ふ下り洋船と操ふて  
後再舉を謀るふ晚き事ゆらん各議稍一決せしむ真  
木松山等の謂く公等の議論局めて當れ然も共我輩  
ら這軍の魁首とあり士卒と鼓舞して此敗を取ら何の  
面目うあつて君侯ふ謁せんや故ふ公等努力し本國ふ飯り  
再舉を謀つて我輩が千古の辱を雪げよし未だ謂終らさ  
る遠村巴ふ金鼓の聲听へけよ是ううらず追討の兵々  
らんらん衆人率ふて山を下り西と差てぞ落行けり少

一復古六下七

時して合津の藩神保内藏之物と討手の隊將と果して十五  
百餘と卒ひ来る新徴組の浪士之が先鋒とあり彦根桑名の  
兵并ふ佐々山の兵等應援とと半途ふ和へたり徳て討手  
の先鋒も天王山ふ攻登る可くと關と作つて既ふ坂口まで  
進しし山上寂莫たりと看る先鋒皆笑つて云ふ我輩始  
て長軍の怯ありと知る渠一戦ふ敗北し死と喂きて本國ふ  
走りしあらんと徐々山ふ登り漸くみし其の中坂ふ到る  
や否真木松山等林樹の隙より小銃を共先鋒ふ打突つ飛



玉雨の如く多きを新徴組大い小狼狽騷擾して天庭ふ四  
五人撃斃さしけき敵の伏兵起りたるぞ油断せざと先  
と争ひ各山を下らんときり長軍是が機小乗ト山上よ  
り聲を初り會賊候よと叫びけき會津の兵も如何  
ある謀畧ゆらんやと敢て近付く者もなかりしを真  
木松山以下十七名も衆寡敵まべかりざるを知り火を  
山上の陣屋ふ故ち各火中ふ投死せり是ふより會津の  
兵等勇と鼓舞一齊く上り至るや別ち唯十七名

復古六下八

の死散と過半焼燬一灰燼の中ふ横たつると見るのそふ  
して大いふやめ欺くことと愧づ斯く會兵等ハ山を下り  
神職津田加賀の邸宅ふ故火せり火焔序次ふ廣か  
る八幡宮の社内の残らば續ひく神宮寺觀音寺其他  
一守残らば類焼一尚民屋ふも故火せりふ百五六十  
戸も焼失せり其が中ふも寶寺ハ恙なうり一住僧丹  
元和尚も長軍ふ同意せり由つゝものありて會藩小虜  
とありぬ又長軍の捨置一兵器糧米を令捕一當驛



炮撃し之を殲滅せよ時、使番新見内膳。侯の側あり奮然進んで敗北の兵を捕らふ。何ぞ銃丸を煩むすあ至らん。一喝是を縛きべし。侯我に任す人とな急み弛く河岸に至り白刃を揮ひ飛んで船中に入り。高松藩も競く是に懸ぎ船中に入り。かば長兵大いみ駭きく或る水中に身を投じ或る割腹する者二十二名。遂に壹人も逃るを得ず。亡びし徳に後幕府より新見が單身直進の功を賞し恩賜ありしとあるん此

横吉六下十

餘淀川邊川口其他の警衛より敗北の兵を縛し出せしもの約莫七八十名に及びし。より同日二十三日黎明大坂長州藏邸の留守居北條瀨兵衛浪花を發して本國に皈る。この幕府長藩脱士等々禁闕と擾乱せし罪を責し北條氏をして大坂を去らしめし。より同日二十三日幕府大坂の防火夫を命じて長州の藏邸を毀ちその儲米四千八百七十石を收め京師の兵火を罹りたる者も與へ大いみ洛中と賑をなれ然るに復江戸より長州

薩會長軍  
の糧米を  
市民の賑  
へす



復古六下十一

郎の家什を九月二日府下の防火夫に命じ芝新銭座の調  
練場及び越中島ふその家什を運送し是と尽く焼捨て  
尚長州の留守居遠藤太一郎與平數馬等が捕へ某の  
藩郎に禁獄せし是よりさした幕臣股屋卯三郎遠藤等  
み書と贈り幕府の事情と通せし緯ありしは知り其  
罪と責り卯三郎み死と賜ふ然るに後幕府如何なる所  
置みやとりけん遠藤以下の數十名を長州に送り  
遣りける

因みり前編第二十二回より二十五回までハ京師變動  
のまじりありしと今這回より漸く書尽し  
許より杜撰の條下り考かん附し謂まくりきと  
あり這程山田氏が著したる近世事情と題号せし  
史畧を一讀ありし第二編二の卷五十四丁六條より目  
み〇十八日云々此日遠藤太一郎與平數馬モ死ヲ賜  
ハル〇とあり這も何等の書よりし抄録せし  
もの最も誤りたる率ありけり書中皆往古の史ふ

だも誤り多きを得ざれば強う云んも流石なれども  
現在存生する人と死せしと書きたるは其誤りなり  
正さるるを得ず遠藤太一郎も今山口縣の官員なり其  
官歴ふ列し亦與平數馬てふ人の東京府下ふ寄田倣  
して其の省ふ出仕せり俱ふ毛利家の舊臣現今を  
山口縣の士族なり拙子の遠與の兩氏と一面識ふも  
及ばざるとも毛利氏の事ふ関する條下る其藩の入り  
問ひ試し故あると云く彼の兩氏が存生するの證一我

復讐六下十二

知り依つて山田氏の誤りと正訂し録し茲に述る  
みまゐ

第二十六回

却而説七月二十四日幕府外國奉行池田筑後守河津攝  
津守河田相模守の三士と罰するに俸禄を削り禁錮せ  
しり更ふ合原猪三郎も外國使節を命ぜ違ふ去年  
筑後守等幕府より鎖港為すべきの命を奉り各因  
み涉らんと先づ佛蒙西の都府馬理西ふ到り命を

其政府の説と人ども佛入更み昔ざるのをう這國の  
文物典章煥然たるをこく大いみ悟る所ありや夫  
より各国を巡らばして是月同所を出帆做し歸朝  
のう人鎖港の不開化ある彼地に入て説はくさる  
音を陳し一か幕府の筑後守等が使命を辱し一めた  
りとして終ふ茲に速かに徳も亦幕府の長藩の輩  
下と擾乱せし致さるる 朝廷は靖ひ奉り毛利家一族  
の官爵を削り長防追討の令を諸藩に下し紀州中

復古卷下十四

納言と総督松平越前守と副將軍として薩州以下二十餘藩  
の兵を分署し將軍の亦親ら是に継いで大いみ行軍を起  
し疾し長防に入らん 又兵糧等の備へ嚴密なり是  
より嚮幕府大いみ諸藩の戦功を賞し 朝廷は靖ひ奉  
り位階を進めしむ此日八月 朝廷松平土佐守を少將に任む  
是より久し京師に在て精忠を抽んでありありあり  
復朝廷十八日の變動ありしより鷹司前関白中山前中  
将有栖川の宮正親町大納言日野大納言石山少將等

十數名の参朝を禁ず這へ長藩も通し與謀ありん  
事と疑へむあり茲も復八月五日外國の軍艦十八艘長  
州赤馬ヶ関も来り襲んとすの緯甚ど急あり這へ是  
より先各國公使横濱に會合一長州も至り討んと日々  
小軍事を議せりも幕府も長防を追討せんし既小諸藩  
に令を下すと聞き是より先も襲撃せんと遂も軍  
艦十八艘を以て赤馬関を襲ふも長藩も亦炮を發  
して之を防ぐ彈丸飛んで炮煙海を蔽ふ斯る折り

復古六下十五

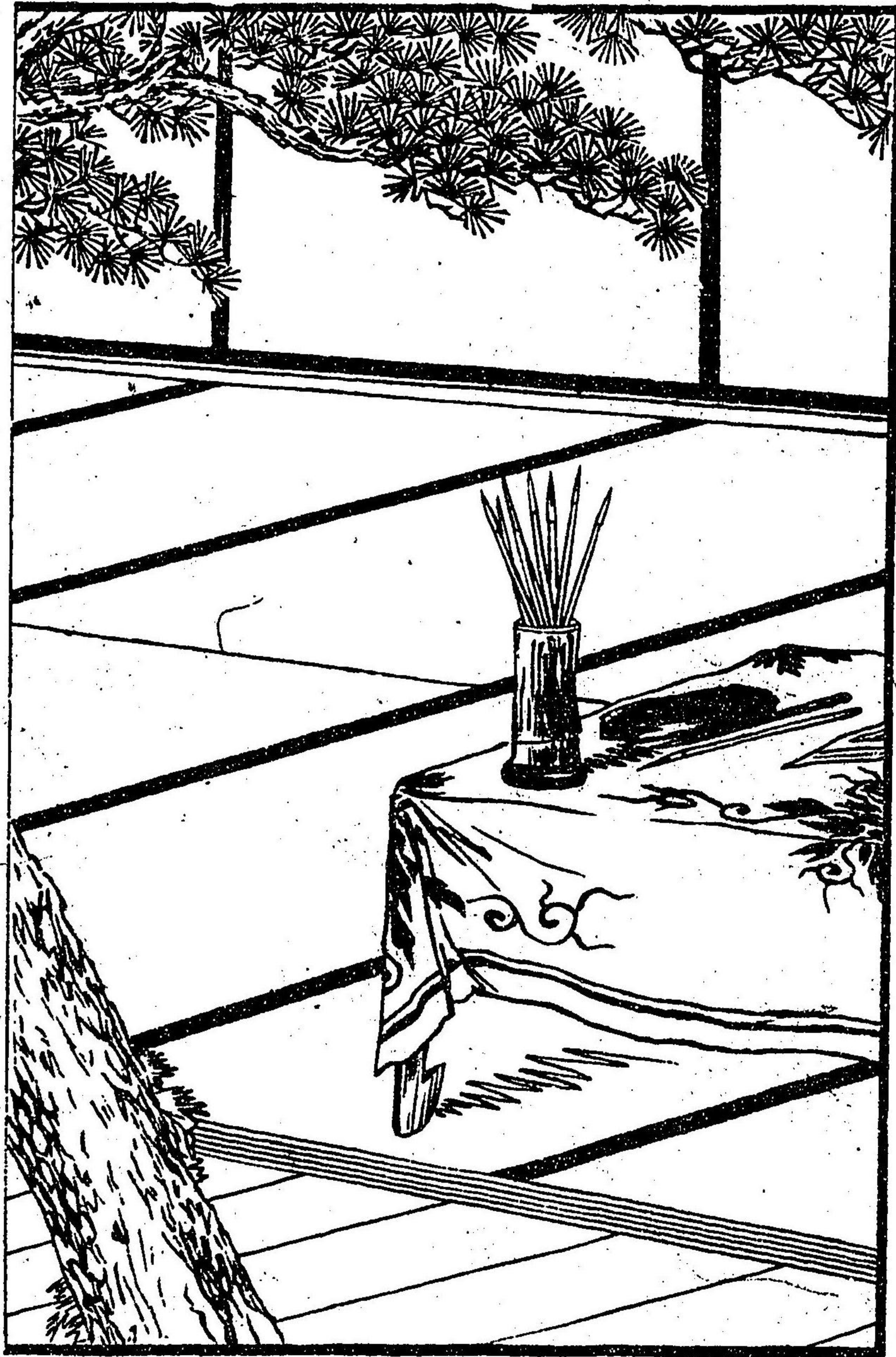
日已も暮んとすけもば兩軍兵を引く止戦す同六日洋  
艦曉も乗とり急も砲臺を撃事甚と烈しけもば長  
軍伴り走りて是を避くると洋人勝も乗つて上陸し  
隊伍を備へ砲撃し進も来り長軍の陣營を燔うち直  
ちも角石山も陣取做すも同七日長軍角石も来り炮  
戦數合互も勝負つりかど長藩已も彈薬の準備  
竭きけもば渠と闘ひ勝ちぐささを度り候節も洋艦  
も絶て和睦を請ふ然るも洋人の長藩を責ては昨年



の暴戦實に責ざるを得ず依つて戦ひを止めんとな  
るに今若干の賸ひ出さべし時ふ長藩渠ふ答へてふ  
昨年きねんの挙動きやうどうも我成われなす所ところみわらず 朝廷てうていの命いのちを奉ほうじ政  
府ふの指揮しきふよろしく改あらたせりと五月十日を以て攘夷期  
限げんの勅書ちくしょ并ならび幕府ばくふの軍令状ぐんれいじやうと洋人やうじんみえせしうが渠  
漸あくみし承諾じやうだくし然しかれハ賸金しやうきんと日本政府にっぽんせいふより得  
んと別わかち長藩ちやうはんの重臣じゆうじん井原いづはら圖書とくしょ参謀さんぼう大田おほの市之進いちのしんと共  
幕府ばくふの逼せまる證あかしとして誘よほふ兵へいと纏まとめし横濱よこはまふ来

復古六下十六

り幕府ばくふの迫せまり賸金しやうきんの事ことを責せむ幕吏ばくし遁辞とんじを以て是こゝを  
避よこんとしきまに洋人やうじん長藩ちやうはんより賸金しやうきんの出いさるの議論ぎろん我  
々われら一ひと井原いづはら大田おほのの両氏りやうしより幕府ばくふの罪つとあり事ことを辨わせ  
し幕吏ばくしの遁とまぐさきと謀まり遂ついに賸金しやうきん三百萬  
弗なと各國こくごふ分與ぶんよせんと約やくせ是こゝより各國こくごの賸金しやうきんを促う  
すに頗すこる切迫せきぱくありし幕府ばくふ大おほい其その所ところ置おけし困こ苦く  
を却かえり而して説せつ八月八日幕府ばくふ紀伊中納言きいなかのうごんの総督そうとくを罷おり尾張  
大納言おほのなごんと之これを代かりし時ときふ毛利父子書もうりふしと龜井かめい彦ひこ石州津いしぢうぢん和野わの



み送りてつゝ今般家臣京師ふ登り強く歎願倣んと  
ありと國老三名と遣り之と鎮靜せんとして却る亦  
其首謀と成り大りの輦下と發擾するを臣父子の  
罪逃を難し然とどり勤王愛国の素志曾て愛せ  
ざるとバ情ふ腹臆なく閣下の所見と懇諭し且つ朝廷  
幕府への衝罪を周旋あつんとと亦十八日長州侯書  
と朝廷ふ奉りその罪を謝してつゝ去月十九日の夏臣  
深く恐懼戦慄辞を謝すべき無し勿論福原益田國

傳吉六十八

司の二名を臣が鎮撫の命ふ背き却て是を謀首と倣る實  
み天地も容をさざる逆臣多き今這の三名を臣が支族毛  
利左京亮が郎ふ幽しつゝ後命と俟しむ府で踏ふ  
嚴謹とつゝ是を處分せんとして或は近藩或は親藩ふよ  
りて朝廷幕府ふ謝罪あるといふ人ども素より幕府の  
長州と討んと決議する物々毫も採用あつたりける茲  
ふまゝ幕府を十月六日箕作貞一郎同秋坪福澤諭  
吉と接擢して洋書翻譯の事ふ従事せしむ同十六日

幕府昨年かまふの春將軍はるしやうげんの上浴じやうよくせしと祝いわまるとし金六万三  
千四せんと府下ふらの市民しやうみんの賑あそひの時とき品川しんがわより吉原きちげんに至いたる  
まの府下ふらの戸數とすう十三万三千六百二十一軒けんありしを之これと平均へんぐん  
して家毎いえごとに銀三貫百三十九ぎんさんぜんひやくさんじゅうきゅうふ當あたるとし同十八日幕府かまふ肥  
田濱ひたまたま五郎ごらうが蒙國もうこくふ使つかひせしとまのり黄金こうごん若干いくばく版二領ばんにりやう  
と是これふ賜たまふ十二月十二日林伊太郎はやしゐたろうが學問所頭取がくもんじやうとうりを罷  
りり伊太郎いとうらうの歸かへりして鶴梁つるりやうとよ江戶えどの人ひとみいで如時ごとの  
不羈ふまの生なまありしが年二十四としにじゅうよふの節ふしと折をり書しよを讀よ

復書六下十九

と長野ながの豊山とよやま先生せんせいの事ことへ學業がくげふ大いふ進すすと後のちち御おん筆ひつ等ら  
同心どうしんより参遠さんえん二州ふたしゅうの代官しろがみとあり至いたる所ところ成政なりまさ續つづあり伊  
太郎いとうらうまゝ劇職げきしやくに居ゐるとし人ひとども常つねて筆硯ひつゐんを廢すせず  
作る所つくるところの文章ぶんしやう積つつと數冊すうさふとあり名なけり鶴梁つるりやう文抄ぶんせう  
とよとよ文勢ぶんせい快活くわいかつ活潑かつぱくの飛とんと欲ほそ實じつに關左せきざ文壇ぶんだんの淵えん  
藪やぶありとり十九日幕府かまふの薩州さつしゅう會津あゐづ彦根ひこね等らの數すう  
侯こうに各名あなづな刀一口たがひちと賜たまふ這この禁闕きんけつ防標ぼうひょうの戦功せんこうありとよ  
徳とくて復尾張ふきやう大納言おほのしやくごんの嚮むかふ長州ちやうしゅうへ脱走だつそうせし三條さんじやう以下いひか五脚ごくわく

と薩州肥後等さつしゅうひごとうの預けあかん事を幕府まくふに請ひこの蓋けふし七卿しちけい  
 の内うち錦小路にしんこうぢの長門馬関ながとまかんの病やんで後のちに黄泉よみの客きやくとらう一  
 卿けいの他邦たはうに脱だつして国くにに非あらずとりの之これ澤さわ主ぬし水頭みづかみ宜嘉卿よしかけいと  
 徳とくく尾張おわり大納言だいなごんの長防追討ながぼうおひの兵へいと督とく一いつ藝州げしゅう廣島ひろしまに  
 至いたり練れんとして毛利家もうりけの罪つみを問とひむ時ときに萩はぎ侯こう父子ふし専せんら  
 恭順きんじゆんと主しゆと自らみづかみ寺院じやういんに屏居へいきよ一問罪もんざいの師来しらいのみ臨りんみ  
 益田福原國司えきだふくわらくにがしの三國老等さんごくらうとう主家しゆけの難なんを解とんと自らみづかみ罪つみを  
 引ひて支藩しはん吉川監物きちがわんげんぶつが岩国いわくにの城中じやうちゆうに入いり自移みづかみす死しの望のぞ  
 復百六下二十

んで三國老さんごくらう各おの各おの辞世じせいの歌うたあり因よふよりより録ろくす  
 益田右衛門助親えきだゑもんすけちか施せ辞じ世せいの歌うた  
 今いまさうう何なにをももうういいんん字じの蟬せみ比ひよりよりも何なにももの代しろの代しろる世よは  
 福原越後元ふくわらえちもと憫ひん々々  
 苦く一いつさんさんたたのり我身わがみのゆゆふふけけうう空そらふふうう名なの捨すててふふすすの  
 國司くにがし信濃朝相しんぬあそ相あ全ぜん  
 飛鳥川あすかがわきのめめ變かる世よの中ちゆうに憂うれ瀨せふふたた川がわに我身わがみありあり  
 志こころしし程ほどみみ毛利もうり父子ふしに偏へんに恭順きんじゆんをを音ねととて萩はぎの城中じやうちゆうを

更まり市街いちがいの家毎いえごと咸みな門戸かどを閉とぬ然しかるは不た殺ころ侯こうの彼かれ  
の三大夫さんだいぶが首級しゅきゅうを出だして罪つみを謝あやませんと既すでに准備じゆんび調ていひし  
から其臣そのおん志道しだう安房あへとて追討おひき総督そうとくの木陣きじん藝州えしゅう廣島ひろしまふ  
首級しゅきゅうを持もつりけのが是これより総督そうとく尾張おわり大納言だいなごんが什寮じしやうある  
決断けつだんありや否いな其委そのあひしきを知らんとあるまの第七編だいななひ二十七  
回の條このじょうを讀よみ知る可べし

復古夢物語第六編之下終

復古六下廿二

明治九年一月十日出版

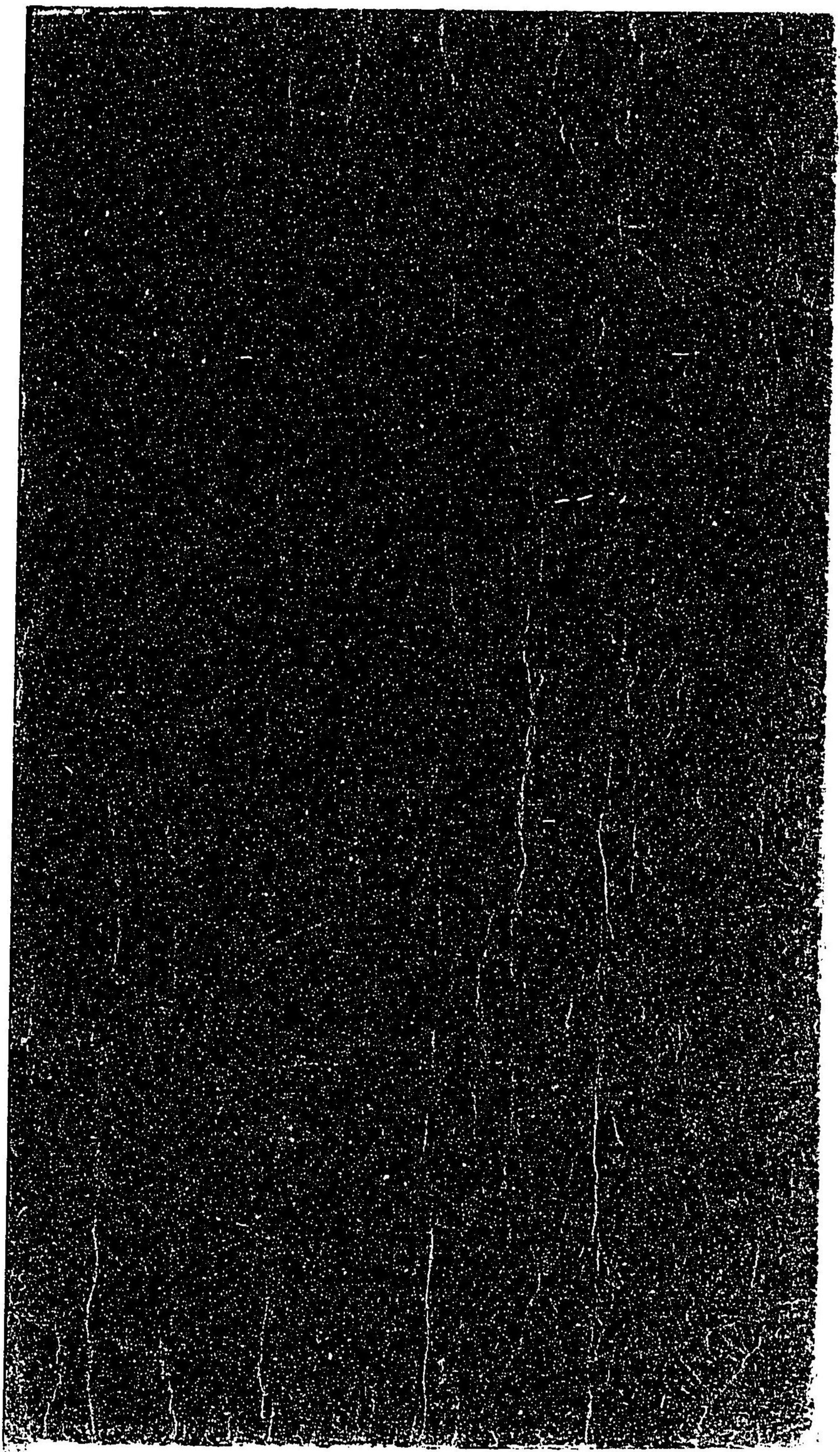
定價廿五錢

東京濱町二丁目十一番地寄留

著人 松村 春 輔

稱左衛門町四番地

東京書肆 出板人 武田傳右衛門



使古器物類考

特41

269

